

本報告書の要約

第1章 妊娠・出産の実態

この章では、妊娠・出産の実態と、親になるための準備行動や意識について、実態を中心に紹介している。妊娠した経緯は、妻全体の約半数が自然にまかせて妊娠したが、13.7%は夫婦あるいはどちらかが不妊治療を受けてのものであった。出産を決めた理由（複数回答）は、「自分の子どもが欲しかったため」「好きな人との子どもを持ちたかったから」「結婚して子どもを持つことは自然なことだから」が主なもので、ついで年齢に関連する理由が続く。

妊娠期の妻と夫は、妊娠している状態を肯定的に受け止め、おなかの子どものことをいとおしみながら生活しているが、はじめての出産に際し、妻・夫ともに7割以上の人が妊娠の経過やお産の痛みを不安に感じている。

妻全体と夫全体では、約半数の人が赤ちゃんとの触れ合い経験がないまま親になる。その経験不足を補うために、育児期妻の8割以上は行政や病院などが主催する母親学級に参加している。夫との参加は約5割である。

出産は、95%以上が「開業医の産院」や「総合病院・大学病院の産婦人科」で出産している。「助産院」での出産は2%に満たない。出産する施設を選んだ理由（複数回答）は、「自宅（または里帰り先の実家）から近いから」ということが突出している。出産に際し、里帰りした育児期妻は4割強いるが、里帰りした人の約4分の1は、「自宅のある地域」で出産し、産後を過ごすために里帰りをしている。育児期夫は半数強が出産に立ち会っている。

理想の子どもの数は、妻・夫ともに、「2人」が6割前後でもっとも多く、ついで「3人」が25%強である。子どもの数や性別に理想を持つ場合、「女兒と男児を1人ずつ」を理想とする人がもっとも多かった。

第2章 養育態度と子育て意識

育児期妻・夫とも、子どもに対しては、あいさつやしつけなどは高い意識を持って接している。妻・夫とも、しつけには厳しかったが子どもの意見を聞いてくれる親、温かい愛情を持って子どものことをよく理解してくれる親に育てられた人が多い。

0～2歳の幼い子どもを育てる日々の中で、7割以上の妻は、自分のための時間を確保することが難しいと感じ、その半数以上が、自分のための時間が持てないことにストレスを感じている。子どもとのかかわりの中では、子どもに文句や不平を言われたり駄々をこねられたりすることにはストレスを感じがちであるが、遊んでほしいとせがまれることはあまりストレスと感じていない。夫も、もっとも強くストレスを感じていることは、自分のための時間が持てないことであるが、妻に比べるとその割合

は低い。全般的に、夫は、育児・家事の主たる担い手である妻よりも、ストレスをひきおこすような日常の事柄に対して、経験率もストレスを感じる率も低いようである。

妻・夫は子育て生活全般について、負担感はあまり感じず、育児に充実感を感じ、育児を楽しんでいる。また、はじめての子育てに奮闘するなかで、妻・夫ともに半数以上が、親としてそれなりにうまくやれていると自己評価している。

第3章 子育てと夫婦関係

妻と夫で、家事・育児への取り組み具合をみると、大きく差が開いている。妻はほとんどの項目で、ほぼ毎日取り組んでいる比率が7～9割であるが、夫はすべての項目で妻よりも低く、また、家事よりも育児に取り組む傾向がある。妻が仕事を持っている場合は、仕事を持っていない場合よりも、夫が家事・育児にかかわる頻度が高くなっている。

育児期・妊娠期の夫婦関係をみると、妊娠期の妻と夫はどちらも結婚に対する幸せの度合いや配偶者への愛情が高い。育児期では、子どもの年齢が上がるほど、妻・夫それぞれの配偶者への愛情が下がる傾向にあるが、家族と一緒に過ごし、家庭内の問題には夫婦で解決に向けて積極的に対応することは多いようである。

自分の役割配分（親としての自分、妻／夫としての自分、社会人・職業人としての自分、個人としての自分）では、現実と理想の差が離れているのは、育児期妻・夫である。育児期夫は、社会人・職業人としての役割は、現実よりも理想のほうが低く、親として・夫として・個人としての役割は、現実よりも理想のほうが高い。仕事に忙しく、そのほかの生活とのバランスがうまくとれていない状況にあるようだ。

第4章 子育ての環境

物理的な子育てサポート環境として、近所にどのくらい妊娠・出産や子育てに必要な環境が揃っているかをみると、自分を診てくれる産婦人科や助産院が近所（徒歩20分圏内）にないと回答した妊娠期妻が、約半数を占めている。育児期妻では、散歩のできる公園や遊歩道は7割が近所（徒歩20分圏内）にあり、子育て支援施設は5割が近所にあるようだ。子どもの預け先では、0～2歳の子どもを持つ育児期妻の約5人に1人は、定期的に託児施設や保育サービスに子どもを預けている。子どもの保育先に対する信頼性は、肯定的な回答が9割を超えており、非常に高い。

妊娠・出産・子育ての人的な相談相手については、妊娠期・育児期の妻・夫ともに配偶者がもっとも多い。妻は、自分の親や友人、産婦人科・小児科の医師などの専門家へも相談しており、相談相手の種類が多い。夫は、相談先として配偶者以外の割合は少なく、相談相手の種類に乏しいようである。

子どもを通じた地域のつきあいの人数は、子どもの年齢が上がるにつれて徐々に増えていく。地域のつきあいの中で、子育ての悩みを相談できる人を1人以上持つ人は、子育ての充実感が高く、相談できる人がいない人は、子育ての不安感が高い傾向にある。

第5章 妊娠期・育児期のワークライフバランス

本調査で回答した妊娠期妻のうち、仕事を持っているのは30.4%だが、妊娠を機に仕事をやめた人も47.4%いた。仕事をやめた理由でもっとも多かったのは、「妊娠・出産にまつわる健康上の理由から」で、やめた人の45.5%が挙げていた。育児期になると仕事を持っている率はさらに低下し、22.8%だった。仕事を持っている人の就業形態をみると、妊娠期よりも「常勤職」が減り、「パートタイム・アルバイト」が増えていた。妊娠・出産を経て、就業継続した妻は育児休業制度のある会社や事業所に所属し、制度を利用した人が多かった（就業継続した人のうちの72.8%）。妊娠期妻を持つ夫については、34.6%が育児休業の取得を希望していたが、これは妻の仕事の有無とは関連がみられなかった。

この1か月の間に経験した職場ストレスとして、妊娠期妻の場合、「通勤に時間や体力をとられる」が第1位に挙げられていた。育児期の夫と妻では、「仕事が忙しすぎるので、子どもと過ごす時間が少ないと感じている」がいずれも第1位だった。仕事と家庭生活のバランス満足度については、妊娠期・育児期ともに妻よりも夫のほうが不満を持つ人が多かった。

育児期の共働き家族は、妻の両親または夫の両親と「同居・二世帯住宅・同じ敷地内」に住む割合が妻が仕事を持っていない家族よりも多かった。また、仕事を持っている母親の子どもは祖父母と会う頻度が高かった。

第6章 妊娠期・育児期のQOL

この章では、国際連合世界保健機関が定義する“健康”の概念にそって作成された「クオリティ・オブ・ライフ（QOL）」に関する評価方法『WHO QOL 26』を使って、妊娠期・育児期の妻・夫のQOLを分析した。QOL指数（自分自身の生活の良質さ、健康さの評価、以下QOL）は、妊娠期、育児期（0歳、1歳、2歳）で一貫して夫よりも妻のほうが高く、子どもが2歳の妻と夫の差がもっとも大きかった。また、妻・夫ともに、妊娠期と比べると、育児期のQOLは低い。妻の場合は、育児期の間はQOLに大きな変化はみられないが、夫は、子どもの年齢が上がるにつれて、QOLが徐々に下がる傾向にある。

『WHO QOL 26』は、全般的な生活の質について問う項目と、身体的領域、心理的領域、社会的領域、環境領域の4つの領域を問う項目に分かれている。それぞれにつ

いて、妊娠期と子どもの年齢別に妻と夫の平均値を比較してみると、生活充実感や自己評価に関する心理的領域では、妻のほうが夫よりもQOLが低い、対人関係に関する社会的領域では、一貫して妻のほうが夫よりもQOLが高く、良好な状態にある。

自分から相手への情緒的サポート（仕事、家事、子育てについて相手をねぎらう）に対する評価は夫婦間であまり差はないが、相手からの情緒的サポートに対する評価については一貫して妻のほうが夫よりも低かった。また、「配偶者の仕事、家事、子育てをよくねぎらっている」で、できている群（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）のほうが、できていない群（「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」）よりも、QOLが高かった。家事や子育てを分担し助け合っていると感じている夫婦のQOLはそうでない群よりも良好で、夫婦ともに「親としてそれなりにうまくやれていると思う」と回答する割合（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）もより高い傾向が示された。

育児期の子育てサポート環境については、近所（徒歩20分圏内）に公園や子育て支援施設、小児科や産婦人科の医院がある群のほうが夫婦ともQOLが高かった。育児しづらい間取りや親のプライバシーを確保しにくい住居に住んでいる群のほうがそうでない群よりもQOLが低く、住環境の子育て利便性も関連要因の1つであることがわかった。子育てのことを気にかけてくれる近隣の人がいることも親のQOLと関連していた。